

# 郷土史を土木史の教材として

東京都立田無工業高等学校 正会員 大貫三郎  
他生徒34名

Local History as Teaching Material  
for History of Civil Engineering

by SABURO ONUKI  
and 34 STUDENTS

## 概要

庚申塔・馬頭観世音・お地蔵さま等は、日本全国にあり路傍の石仏とか、野の仏たちと呼ばれ、親しまれている。それらの多くは江戸時代に造られ、信仰のシンボルとしての役割を果たしてきたと同時に、旅人に対する道しるべとして大切な存在であった。しかし、現在それらの石仏達は、役目を終えたかのような存在になって簡単に移転されたり、壊されたりしていると言う。

今回、田無市にある石仏たちを中心にして、田無の町の歴史を生徒と一緒に調べた結果次のようなことが分かり、土木史の教材として郷土史を扱うのが非常に良いと思った。

1. 庚申塔・馬頭観世音・お地蔵さま等について調べると、江戸時代の民俗信仰が分かり、村人達の生活様式の一端を想像することが出来る。
2. 石仏達が身近にあるので、調査がしやすく、疑問点が出たときでも簡単に調べに行く事が出来る。
3. 地図に石仏たちの立っている位地を記入し、江戸時代の地図を重ねると、江戸時代の道路網と、現在の道路網との比較が出来る。
4. 地図を見た時でも、自分たちの町の状況は良く知っていて、古い地図を見ても理解が早い。(田無、石仏、教材)

## 1. 石造遺物の調査

田無市教育委員会が発行している『田無の石仏』と言う小冊子を基にして、調査を開始した。最初は小冊子通りの場所に在るか、無いかの確認から始めた。しかし、風化の進んでいる石仏に行当たると、刻んで文字の確認がとても難しかった。又明らかに文字を削り取ったものとか石仏の顔の欠けてるもの等をみると、文化財保護に対する考えかたが自然と湧いてくようだった。道路の拡幅工事の為に移転した石仏を見ると、道しるべの役を終え、住宅街にポツンと立っている姿は、『開発と保全』という事を考えるのには良かった。



写真－１．田無の代表的な庚申塔１７１７（享保２）年造立。柳沢宿の分岐点に建てられていたが現在は住宅街にある。撮影、大貫、１９８３、１０

表－１ 武蔵野・多摩地方の庚申塔の数

| 区・市   | 数   | 最初の造立年代      |
|-------|-----|--------------|
| 杉 並   | ６６  | １６８１（天和 １）年  |
| 練 馬   | １３１ | １４８４（長享 ２）年  |
| 板 橋   | ２３５ | １６４７（正保 ４）年  |
| 三 鷹   | ３２  | １６６６（寛文 ６）年  |
| 武 蔵 野 | ５   | １６６５（寛文 ５）年  |
| 田 無   | １４  | １６７４（延宝 ２）年  |
| 保 谷   | １２  | １６７７（元禄 １０）年 |
| 東久留米  | １７  | １６８０（延宝 ８）年  |
| 清 瀬   | ６   | １７２５（享保 １０）年 |
| 東 村 山 | １６  | １６７７（延宝 ５）年  |
| 小 平   | １６  | １７１６（享保 １）年  |
| 府 中   | ６４  | １６７４（延宝 ２）年  |
| 調 布   | ６２  | １６６６（寛文 ６）年  |
| 八 王 子 | ８０  | １６８９（元禄 ２）年  |
| 小 金 井 | ２２  | １６６６（寛文 ６）年  |

１９８３・１０月。各市発行の市史より作成

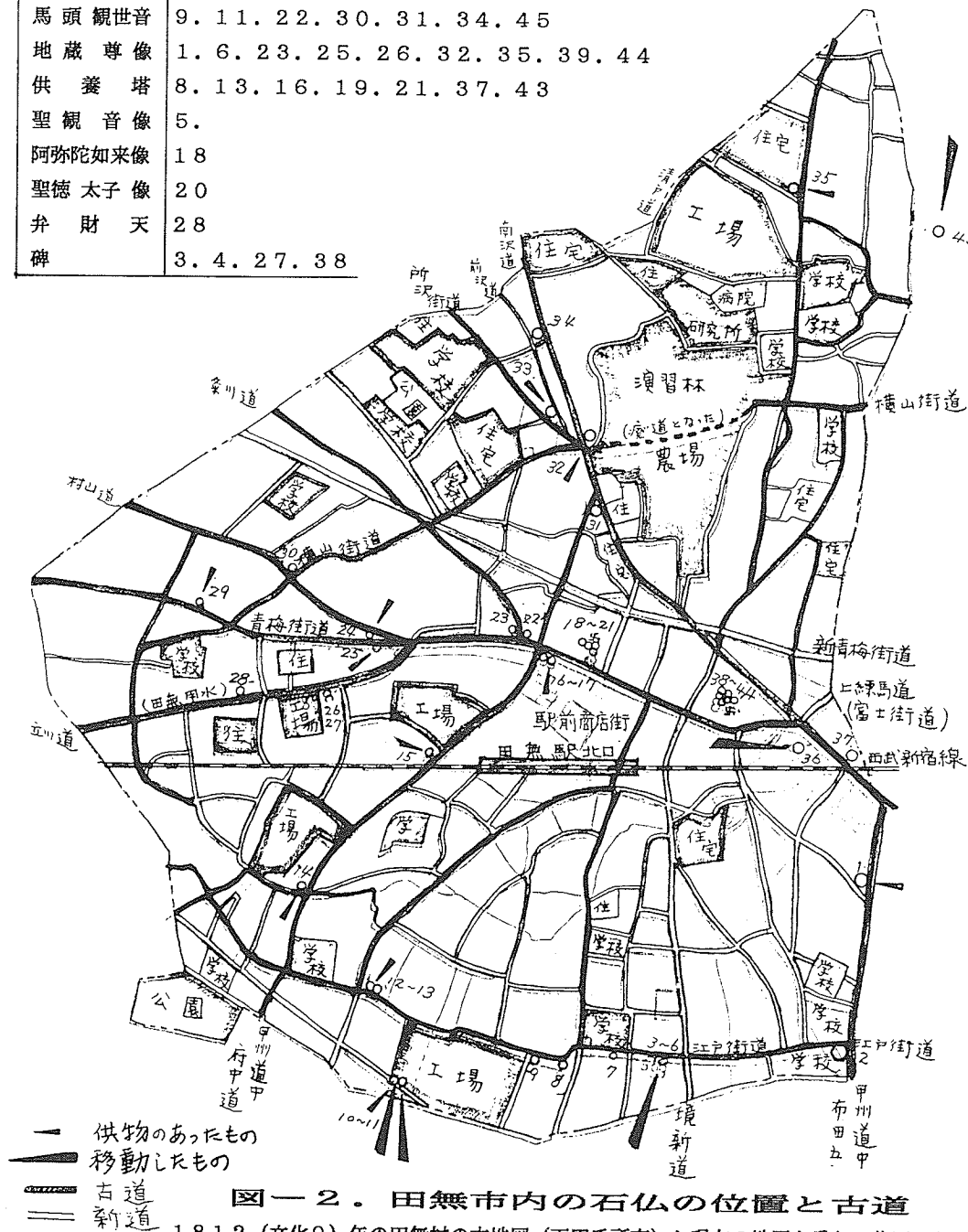
### １－（１） 武蔵野地域における庚申塔と新田開発

石造遺物のうち数の多いのが庚申塔と思われるので、庚申塔の数を各市で発行している市史を基に調べたのが、表－１である。都内の練馬・板橋が圧倒的に多く、次いで、甲州街道ぞいの市である。武蔵野地域で造立年代の古いのが、武蔵野（吉祥寺村）三鷹（牟礼野村）である。この両市とも、江戸時代の最初の頃、開発に着手した。そして、その当時の江戸の町は、火災が発生すると大火になりやすかった。その対策として考え出されたのが、町に広場を設けたり、街路を広げて延焼を防ぐことであった。そこで、幕府は江戸に大火が起きた時、り災者の土地を上地とし、その替へ地として、武蔵野の荒野を良い条件で与え、新村を経営させた。同じころ開発に着手した砂川村・小川村と比較するとその条件の良さが理解できる。例えば、武蔵野開発は、玉川上水が完成した後であるから水の心配はなかったが、砂川開発は用水が出来る迄約５０年かかった。一戸当たりの広さも、武蔵野は他の開発地の２倍から１０倍強の約４町７反であった。このように恵まれた条件で開発した武蔵野では入村後４年から６年で、庚申塔を建てる迄に開発が進んだと見てよいだろう。一方、小川村は５０年後れて庚申塔を建てた。庚申塔は、村人にとって、シンボリック的存在であったと、同時に、生活が安定したことを示していると、考えても良いだろう。事実、石塔を建てるのにはかなりの費用が価かったようである。

### １－（２）．その他の石仏

お地蔵さま、馬頭観世音等いわゆる路傍の石仏以外に、石橋供養塔とか数石供養塔等の、供養塔が目につく。田無には石橋供養がなかったが、他の地域には、比較的多くみられる。用水の上に石橋をかけたのだろうが、供養塔だけで現物が残っていないのは残念である。しかし、昔の人々が、道路とか橋を作って供養塔を建てた精神は大事にしたいと思う。

| 石仏の種類  | 番 号                                                  |
|--------|------------------------------------------------------|
| 庚申塔    | 2. 7. 10. 12. 14. 15. 17. 24. 29. 33. 36. 40. 41. 42 |
| 馬頭観世音  | 9. 11. 22. 30. 31. 34. 45                            |
| 地藏尊像   | 1. 6. 23. 25. 26. 32. 35. 39. 44                     |
| 供養塔    | 8. 13. 16. 19. 21. 37. 43                            |
| 聖観音像   | 5.                                                   |
| 阿弥陀如来像 | 18                                                   |
| 聖徳太子像  | 20                                                   |
| 弁財天    | 28                                                   |
| 碑      | 3. 4. 27. 38                                         |



図一 2. 田無市内の石仏の位置と古道  
 1812 (文化9) 年の田無村の古地図 (下田氏所有) と現在の地図を重ねて作図した。  
 1983. 10. 田無工高 C1B 作図

## 2. 玉川上水と水車

玉川上水は、飲料水として使用されただけでなく、脱穀・製粉の動力源としても利用していた。大体が平坦な武蔵野原野であるから、水車小屋を作る場合でも苦労したと思われる。古老の話によれば、田無の水車小屋は地下になっていた。そして、使用した水は150m程地下を通して、石神井川に放流したという。田無用水の水門の間口は、4寸（12cm）四方で玉川上水でも一番分水口の小さい用水である。用水が無くなる昭和40年まで水車は存在していた。

## 3. 武蔵野地域の交通網

武蔵野の道路網は、江戸時代とあまり変わっていない。中央高速道路・新青梅街道が出来たくらいである。図-1を見ると田無に道路が集まっているのがわかる。此のことからも江戸時代は、田無が中心的な町であったといえる。

武蔵野市は、五日市街道が中央をとうり、整然と町割がされていることから、新しく作られた村であることが分かる。

明治以降、交通は鉄道が主流となり、鉄道布設に反対した田無市・府中市の近代化に乗りおくれた様子が、町制から市制へ変った年度を見てもわかる。

現在、交通の主流が再び道路に戻ってきたが、江戸時代のままの道路網が交通渋滞の原因となっている。そのため再開発を行なう準備をしている。



写真-2. 馬頭観世音（拓本）  
文字の削られているのが分かる  
撮影. 大貫. 1983. 10

## 4. 田無の石仏と道路網

田無にある石仏を分類したのが表-2である。その位置と田無の道路網が図-2である。江戸時代の道路網と石仏の位置が一致しているのが良く分かる。移動しなければならない理由は有るのだろうが、元の場所

表-2

| 種 類    | 数  | 花、果物等が<br>供えてあった数 | 道しるべを<br>兼ねている数 | 移<br>しているもの |
|--------|----|-------------------|-----------------|-------------|
| 庚申塔    | 14 | 7                 | 4               | 2           |
| 馬頭観世音  | 7  | 3                 | 0               | 2           |
| 地藏尊像   | 9  | 3                 | 3               | 1           |
| 供養塔    | 7  | 0                 | 2               | 0           |
| 聖観音像   | 1  | 0                 | 0               | 1           |
| 阿弥陀如来像 | 1  | 1                 | 0               | 0           |
| 聖徳太子像  | 1  | 0                 | 0               | 0           |
| 弁財天    | 1  | 0                 | 0               | 0           |
| 碑      | 4  | 0                 | 0               | 0           |
| 合 計    | 45 | 14                | 9               | 6           |

1983・10月 田無工高C1区 調査結果



ないと、道しるべとしての意味がなくなるだけでなく、設立当初の人々の願いが何であったかもわからなくなる。どうしても移動しなければならぬときは、元の場所を記録する位の配慮はしてほしい。尚、この調査を終えた後でも、僅かではあるが移動している。

#### 4 — (1) 弁財天と田無用水

一般に弁財天は水に関係した所に祭ってある。『田無の石仏』でも、多分この場所に田無用水が流れていただろうと書いてある。しかし、明確に断定してないので、明治13年測量同19年印刷の陸地測量部の地図と1983年10月、日本交通公社発行の航空写真を基にして確認した。田無用水は、埋め立てられて通学路となっていると、言うはなしであったが、通学路として使用されているのは、商店街の裏だけであり畑のなかは、一部、昔のままである事が航空写真で確認できた。

#### 4 — (2) 聖徳太子像

太子信仰も全国的にひろまっているようだが、今回調べた範囲では、聖徳太子像を田無以外に見つけることは出来なかった。聖徳太子の幼児の時の像を刻んだもので、職人達が講を作っていたことを示している。この像が在るということは、職人達が田無に住んでいたと、考えてよいだろう。此のことからも田無が武蔵野の中心的位置を占めていたということが、分かる。残念なのは石塔の両側面に、名前が刻んであるだけで職名が書いてないことである。

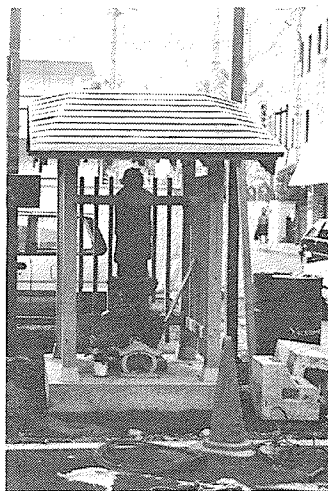
#### 5. まとめ

今回、生徒と一緒に石仏を見て回って、その結果を地図に記入し、年表を作成した。路傍の石仏と言われたり、道祖神と言われたりしているので、何となく粗末には出来ないと思ってはいた、が整理してみると意外と田無・武蔵野の発展が分かり易くこれならば教材として使用できると思った。

民俗信仰としての石仏の存在は、薄れていると言われているが、実際に歩いてみると意外に多くの石仏に、お供え物があり、昔とは違う形で現在も生き続けていることが分かる。土木を学び卒業後、道路工事等に從事することが多い生徒に、路傍の石仏等が、少しでも身近なものになれば幸いである。尚、田無市立中央図書館の秋山さんには資料その他で大変お世話になりました。お礼申し上げます。



写真一3. 撮影1983. 10



写真一4. 撮影. 大貫. 1984.

写真一3、写真一4は、1718（享保3）年造立のお地藏さまで田無の橋場にある。1983. 10の時には写真一3のようであったが1984. 4月には写真一4のように屋根も出来、回りも立派にかこわれた。

しかし、設置場所も少し移動していた。この工事は、交叉点の角を少し大きくする工事であった。移動距離は僅かであるが、設置場所が変わると、本来の意義がなくなる。このような記録を残すことも必要な仕事である。

## 田無付近の主なできごと

|                |                                                                                                                       |
|----------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1308-10 (延慶年間) | 谷戸地区に板碑が建つ。田無市で一番古い板碑である。                                                                                             |
| 1559 (永禄 2) 年  | 北条の家臣、太田康資が田無・東久留米を支配。田無の地名が文書に出た最初                                                                                   |
| 1606 (慶長11) 年  | 青梅街道が石灰運搬のため整備され村民は谷戸地区から本町に移る                                                                                        |
| 1609 (慶長14) 年  | 砂川村 (立川村) の開発着手。岸村の百姓 村野三右衛門が請負開墾                                                                                     |
| 1641 (寛永18) 年  | 將軍家鷹場の外側に御三家鷹場を設置。田無は尾張家の鷹場                                                                                           |
| 1654 (承応 3) 年  | 玉川上水完成。玉川庄右衛門・清右衛門が計画・施工                                                                                              |
| 1655 (明暦 1) 年  | 野火止用水完成 (水口幅一間) 安松金右衛門が計画・施工                                                                                          |
| 1656 (明暦 2) 年  | 小川村 (小平市) の開発着手。岸村の百姓 小川九郎兵衛が請負開墾。箱根ヶ崎と田無の中間に位置し青梅街道の伝間次となる                                                           |
| 1657 (明暦 3) 年  | 砂川村 (7寸四方) 国分寺村 (一尺四方) 小川村 (一尺四方) へ三分水出来る                                                                             |
| 1659 (万治 2) 年  | 江戸大火のり災者に牟礼野 (吉祥寺村) の地が与えられる                                                                                          |
| 1670 (寛文10) 年  | 玉川上水路を幅3間掘り広げた。この結果水量が増加した                                                                                            |
| 1696 (元禄 9) 年  | 千川上水 (水口幅3尺) 田無用水 (四寸) が開通。その後急速に青梅街道に民家が集まり、田無の町場化が進んだ                                                               |
| 1707 (宝永 4) 年  | 新河岸川の川越舟運が整備され石灰は舟で江戸まで運ばれるようになった                                                                                     |
| 1709 (宝永 6) 年  | 石灰が運ばれるようになったので伝馬次としての役目は無くなったが、周辺の村の生産品を江戸に輸送する『商売荷物宿継間屋』が成立し、彼らの扱う荷物は、多摩郡・入間郡から秩父郡まで200村以上に及ぶ村からおくられてきた             |
| 1722 (享保 7) 年  | 幕府は日本橋に高札をだし、新田開発を奨励した                                                                                                |
| 1716-36 (享保年間) | 武蔵野新田の開発が積極的に進められ分水の数も増えた。寛政2年 (1790) には33分水となった                                                                      |
| 1736 (元文 1) 年  | 武蔵野新田83カ村検地、現在の武蔵野地域の市町村の形が出来た                                                                                        |
| 1737 (元文 2) 年  | 押立村 (府中市) の名主・川崎平右衛門、玉川上水両岸に桜を植る                                                                                      |
| 1761 (宝暦11) 年  | 玉川上水の水を水車へ利用し脱穀・製粉を始めた。最盛期に水車の数は33となり昭和40年頃まで使用されたものもある                                                               |
| 1777 (安永 6) 年  | 青梅街道に居酒屋・旅館屋が開店する                                                                                                     |
| 1838 (天保 9) 年  | 田無の名主・下田半平衡富宅が飢きんに備えて稗倉建てる                                                                                            |
| 1854 (嘉永 7) 年  | 名主・半平衡富宅 養老畑をつくり老病者に贈る                                                                                                |
| 1870 (明治 3) 年  | 玉川上水に舟が通る。最盛期には約100船程が利用したが、2年後には水が汚と言うことで、禁止された                                                                      |
| 1886 (明治19) 年  | 甲武鉄道 (中央線) を内藤新宿から田無・府中を経て八王子に至る汽車鉄道と請願した。ところが、田無・府中の人々は機関車の火の粉による火災の危険、煤煙による桑園の枯死と養蚕への害等で、猛反対した。その結果現在の様な直線的なルートになった |
| 1889 (明治22) 年  | 甲武鉄道 (中央線) 新宿-立川間開通、その結果人々は鉄道に流れ、青梅街道はさびれ、田無の発展はストップした。境新道が整備され、明治34年に田無一境間に馬車が走った                                    |
| 1921 (大正10) 年  | 田無-武蔵境間乗合自動車営業開始                                                                                                      |
| 1924 (大正13) 年  | 境浄水場第一期工事完成                                                                                                           |
| 1930 (昭和 5) 年  | 三鷹駅開設・東大農場開設                                                                                                          |
| 1955 (昭和30) 年  | 東大原子核研究所開設                                                                                                            |
| 1957 (昭和32) 年  | 石川島重工田無工場開設                                                                                                           |
| 1962 (昭和37) 年  | 都立田無工業高校設立認可                                                                                                          |
| 1965 (昭和40) 年  | 田無用水は通水路として使用する為、埋められた                                                                                                |

各市の市史より作成 1983.10. 田無工高C1 ㊦